

## 2 旅に出たインド系文字

町田和彦

まちだ かずひこ / AA 研

澤田英夫

さわだ ひでお / AA 研

古典語サンスクリット語を乗せて、東南アジアにやってきた文字は系統の異なる様々な言語に出会い、それを書きあらわす役目を新たに担う。「郷に入った」文字が「郷に従う」までには長い時間を要した。

### アショーカ王碑文の言語

アショーカ王碑文は何語で書かれていたのだろうか？ プラーフミー文字を最初に解読したプリンセプ自身が最初はこの言語をサンスクリット語と思っていたほど、古代インド文化とサンスクリット語のつながりは当時常識的であった。しかし予想に反して、解読された言語は同じインド語派であってもサンスクリット語ではなくプラークリット語であった。

インド・ヨーロッパ語族インド語派の歴

史は、便宜的に古期（前6世紀まで）、中期（前6世紀～11世紀）、新期（11世紀以降）に分けられる。サンスクリット語は古期を代表する言語であり、プラークリット語は中期を代表する言語である。

サンスクリット語とプラークリット語の最大の違いは、音韻変化による音の簡略化である。たとえば、サンスクリット語に豊富に含まれる語中の子音連続  $-C_1C_2-$  ( $C$ は子音) は、プラークリット語では音の同化作用により単純化され、ほとんどが  $-C_2C_2-$  となる。たとえば、サンスクリット語で「7」を意味する *sapta* がプラークリット語では *satta* となるように。また語末の子音はほとんど消失してしまう。この結果、プラークリット語の姿は、日本語のように、語の末尾が母音で終わる開音節中心の言語に大きく変貌する。アショーカ王碑文のプラーフミー文字はこのプラークリット語を表記するための表記体系で

あった。ちなみに、同化の結果生じた *-tta-* のような同じ子音の連続は、アショーカ王碑文では単に *-ta-* と書かれ区別していない。ともかく、時代的に見て、アショーカ王碑文の言語は同時代のインド語派の言語に近いものと考えていい。

### 書記言語としてのサンスクリット語

古代インドでは、伝統的な学芸の媒体としての音声言語であり、神聖な言語とされてきたサンスクリット語は決して文字化されることなく、精密かつ正確に継承されていた。文字化しないほうが正統的だとする時代が長らく続いていたのである。ところがアショーカ王の時代から約600年後、この状況が変化する。芸術・建築・科学・文学の諸分野で隆盛を極め、インド史上「黄金時代」を築いたとされるグプタ朝（4世紀前半～6世紀中頃）の時代、サンスクリット語は音声言語としても書記言語としてもこの王朝の公用言語となり、サンスクリット文字が次々と書かれるようになる。傑作とされているサンスクリット文学のほとんどはこの時代のものである。つまり言語の歴史から見れば、古期インド語派のサンスクリット語が、はるか後世、約千年の後、書記言語の表舞台に登場したことになる。

初期のサンスクリット語碑文は、グプタ時代の前触れのように、1、2世紀頃から出現する。この頃の碑文を見ると、当初単純な線で構成されていたプラーフミー文字に装飾の要素が加わり、インド各地で独自の分化が始まりかけていたことがわかる。そして徐々に、北インドと南インドでは文字の形の特徴がはっきりとした異なりを見せるようになる。サンスクリット語の豊富な子音連続を表記するための結合文字が揃ってくるのもこの頃である。

### サンスクリット語とともに東南アジアへ

さて、こうしてインド各地にひろがりつつあった文字が、故郷を離れ、海をわたって旅に出ることになる。

インドから東南アジアにわたった文字は、時代を経て変化した南インドの文字という見方が定説である。特に、いわゆるパルヴァ・グラタ文字が、字形の類似から有力



東南アジアのインド系文字分布図。  
赤字は、最も早期にインド系文字を受容した民族が作り出した文字。ビュー文字とカウイ文字は現在は使用されていない。

西暦1112年に作られたバガンのラージャクマール碑文。石柱の4面にパーリ語（プラークリット語の一種）・モン語・ビルマ語（以上ビルマ文字）およびビュー語（未解明、ビュー文字）の4言語で記されたもので、「ビルマのロゼッタ・ストーン」とも呼ばれる。ビルマ語面は年代の記された最古のビルマ語テキストである。写真はパーリ語面。





タイ東北部、ピマーイ遺跡での碑文撮影の一コマ。日光と影によって明暗が生じるのを避けるため、本来は光を当てるためのレフ板を、光を遮るために用いている。

視されている。島嶼部・大陸部を含め東南アジアへの伝播のプロセスについては、よくわからないところが多いが、おそらく古くから開拓されていた「海のシルクロード」(別名、セラミック・ロード)と重なるだろう。

東南アジア各地域における初期のインド系文字碑文は、ほとんどがサンスクリット語碑文である。現地の王が自身の権威付けのために建てたものが多い。その時期はサンスクリット語が公式の書記言語として確立したインドのグプタ時代に重なる。このことは、商人のみではないインドからの渡来人や帰化人の存在を想起させる。

### 文字が「郷に従う」まで

故郷インドから東への旅に出た文字が最も早期に出会ったと考えられる民族は、ピュー、チャム(以上西暦4世紀頃)、マレー、クメール(以上5世紀頃)、モン(6世紀頃)である。文字の有用性に気付いた彼らは、サンスクリット語の表記という本来の用途に使い続ける一方で、自らの言語を書きあらわすためにこのインド起源の文字を流用するようになる。最古の現地語碑文の年代は、ピュー語で4世紀頃、モン語で6世紀頃、マレー語とクメール語で7世紀頃、チャム語で9世紀頃と考えられる。

現地語を表記しようとする最初の段階は、少なからず試行錯誤を伴うものであったろ

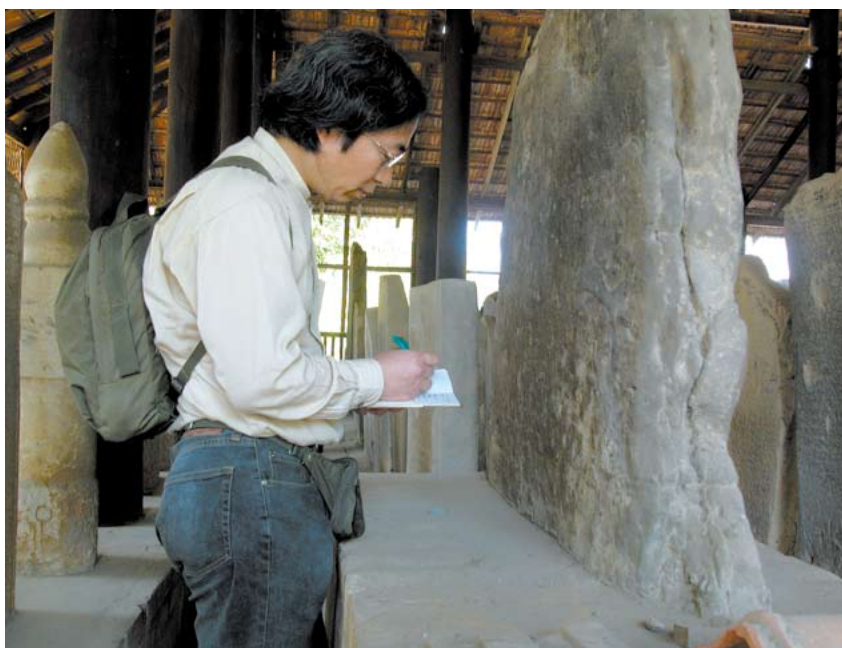
う。その段階をクリアして表記の習慣が定着するにつれ、これら民族の主要な書記言語もサンスクリット語から現地語へと移行していく。マレー語は10世紀頃に、チャム語とクメール語は11世紀頃に、主要な書記言語の地位を獲得したと思われる。

ただし、文字が現地語にすんなり適応したかという、それはまた別の問題である。とりわけモン語とクメール語は、サンスクリット語にない母音の区別を多く有するため、ちょうどカタカナで英語を書くように、母音の区別を正確に書き分けることができない状態が長く続いた。同一の母音表記が複数種の母音を表すことも、逆に同一の母音が複数種の母音表記で書かれることもあったのである。やがて彼らは、既存の記号の新しい組み合わせを考案し、また新しい記号を加えてこの問題を解決するのだが、適切な母音表記のしくみが確立したのは、モン文字では15世紀頃、クメール文字ではそれよりもずっと後のことであった。

マレー世界で8世紀頃に成立したカウイ文字からは、ジャワ文字やバリ文字などが生ま

れた。ビルマ人は12世紀頃モン人から、タイ中部のタイ人は13~14世紀頃にクメール人から、それぞれ文字を受容して自らの文字を作り出した。さらにモン文字、ビルマ文字は周辺のシャン人やカレン人に受容され、彼らの固有の文字を作り出すもとなった。一方、タイ文字は現在のタイ北部およびラオスにもひろがって現在のラオ文字のもととなった。またこれとモン文字との混淆によって15世紀頃生じたタム文字は、タイ北部、ラオスのみならずミャンマーのシャン州東部や雲南に分布するタイ系諸民族によって用いられることとなった。ここに挙げた文字は、ピュー文字を除くと、使用状況に差こそあれ、いずれも現在用いられている文字である。

後から生まれた文字も、既存の要素(母音記号および子音字)を他の機能に転用したり、要素の新しい組み合わせや新しい要素を導入したりして、文字を言語に適應させていった。また、必要のない要素を落とした文字もある。「郷に入った」文字が真に「郷に従う」までには、様々な紆余曲折があったのである。



ミャンマー第2の都市マンダレーの旧王宮碑文庫にて。600枚を超える碑文の位置関係や保存状態を記録することも、研究上欠かせない作業である。